

宙乃塵屑

イラスト/舞猫ルル

オーグ王伝説

"THE LEGENDS OF ORG KING" STORY BY DEBRIS. ILLUSTRATION BY MAINERO RURU

I

試し読み版



BEGINNING NOVELS

第一話 ブタの日常

「おいブタアツ、テメ何のろのろ歩いてんだ遅えぞ！」

腹が立つほどの超絶イケメン野郎が俺を怒鳴りつけてきた。

大量の荷物を背負って歩く凡人の苦勞も知らないで、勇者様は悠々と聖なる装備を身に纏まとった軽装姿で苛立たしげな表情を見せている。

「ハハッ、そう言つてやるなつてアル。あの豚足じゃ歩幅もねえから仕方ねえだろ」

「歩幅がないのであれば、より早く脚を動かせば良いだけの話である」

チャラ男っぽい細身の槍戦士が俺を庇うような台詞を口にするも、嘲笑しているのが一目瞭然だ。

そしてフルプレートアーマーに身を包んだ巨漢の盾戦士はバケツヘルムの向こうから情け容赦のない言葉を吐き、勇者と槍戦士に同調している。

こいつら三人は幼馴染みらしいからな、今日も一緒に俺をいびつて仲良しこよしつてか。

「キャハハハッ、そうよブタあ、あんたマジで遅いんですけどお？」

俺の頭上から美少女魔法使いが甲高く笑いながら文句を垂れてくる。

本来は荷馬車で運ぶ量の荷物を俺一人で背負つてゐるのに、このクソビッチは荷物の上に座つて一人だけ楽しんでやがる。



「皆さん、そう仰らず、私たちも少しは持ちましょう？ さすがにロミオさんお一人では無理があまりすぎます」

我が天使たる治癒魔法士様が穏やかに進言してくださいました。

腰元まで流れる優美な金髪とどんな宝石よりも美しい碧眼、傷一つない白磁の如き肌、そして豊かな胸元にくびれた腰など、スタイル抜群の美貌は今日も全てが完璧だ。

「何を言うておるクリス、お主は荷など背負わんでええんじゃ。そんな力仕事はその肉塊に任せとけばええんじゃよ」

魔法弓兵たるジイさんが心優しい孫娘の意見を即座に否定しやがった。

この魔王討伐隊の過酷な旅路を経ても尚、クリステラさんが五体満足の素晴らしい美貌を保持しておられるのはひとえにこのクソジイの過保護っぷりのおかげとはいえ、そのせいで俺は我が天使の半径三メートル以内に近付くことさえ適わない。

「ですがお祖父様、彼も私たちの仲間ではありませんか。仲間とは苦楽を共にするものだと、そう教えてくださったのは他ならぬお祖父様ですよ」

「ちよつとさあ、あんた何言つちやつてるわけ？ このブタは仲間じゃなくて奴隷だつってんじやん。あんた良い子ちゃんぶるのも大概にしときなよお」

クソピッチはリュックの上でふんぞり返り、舌打ちしながら真紅のセミロングヘアを手入れしている。

振り仰いで見てみると、ミニスカが乱れて微妙に中身が覗き見える。

ふんっ、今日も赤か。

たまには白を穿けビッチ魔女が。

「うむ、マリーナの言う通りである。戦えぬ無能のデブは仲間にあらず」

「そうだけクリスちゃん、あいつは非常食なんだからよ」

「非常食って言ってもお、魔族か魔物に食わせる非常用の^{おとり肉}肉だけどねー、キャハハハッ」

「皆さん……」

クリステラさんが悲しそうに柳眉とエルフ耳を下げ、俺に氣遣わしげな眼差しを送ってください。その雰囲気からして、更に俺の味方をしてくれそうだったが、しかしそうさせるわけにはいかない。あまり俺に肩入れしすぎると、パーティ内での彼女の立場が危うくなる可能性は否めないのだ。実際、赤毛魔女のクソビッチはクソ勇者を寝取られるとでも思っているのか、清楚可憐な美女を嫉妬するあまり敵視している節がある。

「ありがとうございます、クリステラさん。でもいいんです、自分は大丈——ぶフあ!!」

「おいこらブタァ、誰が喋っていいつつつたんだよ、アアおい？ テメエは黙って荷馬車の代わりしてりゃいいんだよ不能野郎が！」

クソ勇者アルベルトから腹に蹴りを入れられた。

脂肪の鎧がなければ衝撃を吸収しきれずに上半身が吹っ飛んでたかもしれん。

こいつ素手で魔族も魔物もぶつ殺せるからな、腹立つけどマジでおつかねえ……

「もうアルつたらあ、蹴るなら蹴るって言ってから蹴ってよねえ。もう少しで落ちそうになっちゃったじゃあん」

「不能野郎って、おま……ブハハハッ、こいつのチンコぶつた切つたのお前じゃん！　つーかマリーナその声やめろってマジでキモいから！」

「これ若造共、僕の孫娘の前で卑猥な単語は口にするなど言うてるじゃろうが。今度口にしおつたらその眉間射貫いたるぞ」

どいつもこいつも、俺のことなんて荷馬車代わりの非常食ブタとしか思っていない。

唯一、クリステラさんだけは出会った頃から俺を一人の人間として見て、優しく接してくれる。この人がいなくなったら俺、今頃は鬱になって自殺してたかもしれん。

なにせ、もう三ヶ月だ。

この勇者一行を名乗る六人に拾われ、来る日も来る日もえつちらおつちら荷物を運び、雑用係として扱き使われてきた。

連中には拾ってもらった恩があるとはいえ、せめて人間扱いして欲しい。

勇者キックによる痛みの余韻を我慢しながら、俺は今日も汗水垂らして草原を進んでいく。

なだらかな丘陵地は広々とした開放感を見せ、ここが魔界や魔國領と呼ばれる魔族共の生息地とは思えない。頭上には雲一つない青空が清々しく広がり、燦々と陽光が降り注いでくる。

たしか俺が拾われた日も、こんな天気の良い日だったっけな。

あれはそう……朦朧もうろうと微睡まどろんでいた俺は激痛で目を覚ましたんだ……

『クリスッ、そんな薄汚れた男に近付いてはならん！』

『そんなことを仰っている場合ですか?! もし、もし、大丈夫ですかっ、しつかりしてください!』
闇の中、最初は誰かの声が聞こえたんだ。

いま思い返せば、あのジジ馬鹿丸出しの声と必死な呼び掛けの美声であるかは考えるまでもないな。

『ふむ、このような魔國領の奥地に人間とは……それになぜ全裸の上、このようにだらしない肥満体なのだ……?』

『うっわ、こいつのチンコすっげえ、これもう馬並じゃねえかっ! アルとマリーナも見てみろっ
てこれ!』

盾戦士ジョルジュと槍戦士ファルケ。

こいつらは最初から負傷者の心配なんぞしてなかった。

『なんだこのサイズは……』

『ちよつともーやだあ、なんでブタみたいな男の裸なん……っつてヤダなにこれえ、超ヤバそうなん
ですけどお』

後から聞いた話によると、俺は満身創痍まんしんそういの瀕死状態で倒れてたつてのに、こいつらはチンコの話

をしてやがった。

仮にも人類の命運を背負う勇者共なら、同胞の心配くらいしろってのによ。

『これは……いけない、早く治癒魔法を……』

『いかんクリスツ、そんな豚の如き男に触れてはお前の手が穢れてしまう！』

『喪失の痛楚、天の陰りの如き暗澹たる惨状は哀憐の苗床。故にこそ富民すらも願い求めん、死気の払除、生気の天来。非力な子等よ祈り賜え、其は挺身の如く、唯一の奇蹟を渴望せよ』

ジジイとクリステラさんの切羽詰まった声は朦朧としていた意識にも良く響いてきた。

ついでに危機感のないクソ野郎共の声もな。

『お？　なんだマリーナ、お前なにモジモジしてんだよ。この馬並見て濡れたのか？』

『なななに言ってるのよ馬鹿フアルケツ、そんなわけないでしょ！』

『……………』

『む？　アル、急に聖剣を抜いて如何した。今は特に魔族や魔物の気配などは感じぬが』
盾戦士なら、このとき人類同胞を守って欲しかった。

しかしジョルジュはクソ勇者を心の友と思っていて、ドワーフのくせに身長が二メートルにも届く生まれながらの変人だ。

あのバケツヘルム野郎は俺へと繰り出された聖剣の一撃を止めなかった。

だからこそ、半覚醒状態で生死の境を彷徨っていた俺は股間部に激痛を感じ、一気に目が覚めた。

そして俺はチンコを失った。

『一心なる想念にこそ天意は応えん、救済の調べよ光天に響け、賛歌宛らに捧げ賜え。其は暗雲を払うが如く、凶兆たる絶望を払い、安楽たる希望を与えん。嗚呼、救治の光よ、冥き闇裂き彼の者に降り注ぎ賜え、癒し賜え。而して我らが祈請は成就せん、天なる癒しよ顕れよ——〈天黎癒〉』

長々と詠唱していたエルフ天使クリスタさんが慌てて最後まで唱えきり、治癒魔法を掛けてくださったので、全身の傷は一瞬で完治した。

チンコ以外は。

本来、彼女の行使してくれた魔法は欠損部位すら再生させる大魔法だったらしいのだが、なにせ俺のチンコを切断したのは人類の至宝にして至高の剣である聖剣エクスカリバーだ。

聖剣による傷は人族だろうと魔族だろうと、どんな魔法でも治癒不能とされている。しかし、聖神の子等とされる人族に対しては、邪神の子等とされる魔族ほど絶大な効果は及ばないし、クリステラさんはエルフの中でも治癒魔法に秀でたホーリーエルフの才媛らしい。

チンコ本体の再生は無理だったが、断面の傷口は塞げた。

『あ、あ……突然のことに焦り、失敗してしまいました……切断されたそちらを傷口に合わせながら行使していれば、癒着させられたかもしれないのですが……』

『何を言うておるのじゃもう良いクリスッ、そんな穢らわしいモノを見る必要なぞないのじゃ！』

あのとき、俺は酷く混乱していた。

目覚めたら血塗れのチンコが地面に転がっていて、なぜか全裸で、しかも超絶イケメン野郎が妬ましくも勝ち誇ったような面^{おもて}で俺を見下ろしてきていたのだ。

『記憶がないのですか？ ご自分のことも何も覚えていらつしやらないと？ では……そうですね、ご自分のお顔をご覧になれば何か思い出すかもしれません。少々小さな手鏡ですが、どうぞ』

『あ、どうもありがとうございま——ってキモ！ なんだこのブサイクすぎるデブは!?!』

名前すら思い出せず、超絶キモメンのデブ野郎が自分だと分かった日には誰だつて混乱するはずだ。

どうやら俺は外見的に三十路ほどのオッサンで、身長は百六十センチくらいの短足野郎らしい。

勇者を名乗る長身イケメン野郎は十代後半ほどの若造で、赤毛の美少女魔女は十代半ばくらい、金髪エルフな美女は二十歳前後、ジジイは五十路くらいの外見年齢だった。

『フンッ、醜^{みにく}いブタのようなオッサンだな。こんな奴はおれたち人類の仲間じゃない、むしろこんな醜^{しゅうあく}悪なブタはここで殺^やつておくのが全人類のためだろ』

『おれもそう思うぜ、アル。こいつ肌^みが緑色だったらオークと見^み紛^{まが}うほどだしよ、さすがに人類の一員としてこいつを同胞とは認めたくねえわ』

『何を仰るのですアルベルトさんつ、ファルケさんつ、私^{わたくし}たちは一人でも多くの者を守り平和と秩序をもたらすため、魔王を討つべくこの地に足を踏み入れたはずです！』

その後は結局、俺を見捨てようとするクソ勇者共をクリステラさんが根気強く説得してくれて、

俺も勇者パーティに同行させてもらえることになった。

俺のチンコを理不尽にぶった切ったクソ野郎には憎悪以外の感情など抱いていないが、ここは魔國領という危険地帯だ。

剣も魔法も使えず、武器どころか記憶すらない身では、連中に頼る他なかった。

今の俺にとつて、クリステラさんの存在だけが生きる糧であり、我がガラスハートの支えだ。

「よーっし、今日はここで野営にするぞ」

丘陵地を延々と歩いた末、日が沈む頃に若造勇者がそう宣言した。

俺は思わずその場にへたり込み、一息吐く。

「おいブタツ、テメエなに勝手に座ってんだ！ さつさとテント張れヤカス！」

クソ野郎の怒声どせげが今日も俺を容赦なくいたぶる。

お前は俺の張ったテントで今夜もクソピッチとやりまくるんだろ？

なにが勇者様ふざけだ巫山戯ふざけやがって……

俺のチンコぶった切っておいて自分だけお楽しみつてか。

いつか絶対復讐してやる。

「ロミオさん、どうぞ夕食で——」

「じゃからクリスよっ、こやつに近付いてはならんと言っておるじゃろ！ 食事なら俺が運んだる

……ほれ、俺の孫の優しさに泣いて感謝しながら食うのじゃぞ」

「あ、ああ、そんな、良いのですよロミオさん、本当に泣かずとも……」
境遇きょうぐうの酷さとクリステラさんの優しさに涙しつ、俺は干し肉を嚼かじる。

我が天使——いや女神様のおかげで食事は普通に与えてもらえるが、量が並すぎて労働量に全く釣り合っていない。我ながらこの三ヶ月で結構瘦やせたと思うが、まだまだ全身が脂肪に覆われたこの身は十二分に肥満体型だ。

「つていうかさあ、いい加減そのロミオとかやめなよねえ。こんなキモメンのオッサンデブはブタで十分じゃない」

「いやでもよ、よくよく考えてみれば豚に失礼じゃね？」

「うむ、ファルケの言う通りである。豚は食えるがこのブタは食えぬ。どちらが人類に貢献できる存在かは論じるまでもない」

そうかよ、どうせ俺は豚以下の人間ですよ。

だが、そんな俺にクリステラさんはロミオという名前を授さづけてくださったんだ。

更には余っていた布で俺の服まで作ってくれて、腰布だけ巻かせておけば十分とか宣のたまってやがったクソ野郎共とは心の綺麗さが別次元だ。

嗚呼、クリステラさん……我が女神……どこまでも貴女様についていきます。

「ブタのことはどうでもいい。それより……みんな、最近どう思う？」

ふとクソ勇者が真顔になって仲間たちに問い掛けた。

焚火に照らし出されるイケメンは夜闇の中で憎々しいまでに眩く映え、クソビッチなどは両目をハートマークにして見とれてやがる。

クソが……いつかテメエのチンコをぶった切ってクソビッチを寝取ってやる。
と思っただけ、もう俺にはチンコないから無理だった。

「最近か、そうだなあ……どうにも魔物の数が減ってきたよな」

「自分もファルケに同意である。魔族共の町が近いのであるうな」

「そーいえばあ、あの拷問した……兎耳族だっけ？ アレの言うことがホントなら、そろそろ中魔族の領地なのよねー？ 王都はまだなわけえ……もういい加減サクッと魔王でも何でもぶっ殺して帰りたいんだけどお」

「魔國領は広大ですから、王都はまだ遠いかと思われます。出発してもう半年以上ですが、これらが正念場となるでしょうし、気は抜かず行きましょう」

ビッチが気怠そうに愚痴を溢すと、女神がやんわりと引き締めにかかると、
その御言葉にジイさんが至極もつともだと言わんばかりに力強く領いた。

「うむ。しかし焦らず慎重に、ゆっくり急いで行かねばの。そして確実に魔王を抹殺するのじゃ。今代の魔王は力こそ弱い、絶大なカリスマを有しておると聞く。奴を殺せさえすれば、八大部族の統率は乱れ、必ずや我ら人類が大戦に勝利できるじゃろうて」

「そうだな、おれたちが魔王を倒せさえすれば、奴らは内部崩壊を起こして自滅するはずだ。出発

前は人類側が劣勢だった……おれたちが魔王を倒し、人類を救うんだ！」

超絶イケメンの若造が珍しく勇者っぽいことを意気揚々と宣ってやがる。

正直、記憶喪失の俺には魔王だの大戦だのどうでも良いことだ。

俺はただ静かにのんびりとハーレムでも作って爛れた生活を送りたい。

もうチンコないからその夢は永久に叶えられないけど……

チツクシヨウ……このクソ勇者様が……っ！

今夜あたりビツチとヤッてるときでも狙って暗殺してやるか？　しかし、そんなことをすれば我が女神は嘆き悲しみ、もう二度と俺に優しさを向けてくれなくなるだろう。

至高の存在に恩を仇で返すことはできん。

べ、べつに返り討ちが怖いわけじゃないんだからねっ！

「おい聞いてんのかブタァ！」

「——つぶふお!!」

いきなり脳天ぶっ叩かれた。

声の主に目を向けると、確実に十は年下なイケメン野郎が顔をしかめて俺を睨んできていた。

「テメ今夜は寝ずに番としとけよ」

「え、そ、そんな、今日はもうクタクタで眠——いぶゆ!？」

「いいからやれつつってんだろクソが！　それともテメエ、この魔國領の真っ只中に一人置いてか

れてえのか？ アアおい？」

「アルベルトさん、暴力はいけません。それにいくら何でも無茶を仰りすぎではありませんか。ロミオさんは今日も私たちの荷を一人で運んでくださったのですから、しつかりと休——」

「貴様この役立たずがっ、儂の孫娘にいらん気を遣わせおつてからにい！」

「やめてくださいいお祖父様！」

結局、我が女神の奮闘も虚しく、今夜は不寝番をすることになってしまった。

所詮、俺は役立たずの超絶キモメンなデブ野郎だ。下っ端の雑用係として無茶振りされる仕事をこなし、クソ野郎共のパワハラに耐えてさえいれば、魔物の脅威から守られてメシにありつけ、なんとか生きていける。

でもさ、何事にも限度つてもんがあるだろ……？

もう嫌だ……転職したい……

第二話 希望を掴み取れ

翌日。

西へ西へと丘陵地帯をえつちらおつちら歩いてみると、巨大な裂け目を発見した。

俺たちの進行方向に対して垂直に——南北にどこまでも亀裂が走り、向こう側までの幅は優に三百メートルを超えているだろう。

「すつげえ……なんだこれ、どうやったらこんな地割れができたよ」

槍戦士なチャラ男が断崖絶壁にまで近付き、下を覗き込みながら驚嘆の吐息を溢している。

ここで偶然を装い、奴の背中を押してやれば真つ逆さま……という思考が脳裏を掠めたが、そんなことをすれば罰として俺まで真つ逆さまの刑に処される。

いびられるのは死ぬほど辛い、死んでしまえば辛いとも思えない。

生きていれば、きつと何か良いことがあるさ。

「天災による断裂にしては規模が段違いだな……まさか、《三魔宝具》か何かの力でできたものなのか……?」

「ううむ……アルと聖剣の全力を以てしても、これほどの谷はできまい。これが《三魔宝具》か何か未知の力によるものだとすれば、些か厳しい戦いとなるう」

さすがの勇者と盾戦士も、畏怖いふの念を滲にじませて唸うなっている。

しっかしこれ、底が見えねえぞ……落ちたら一巻の終わりだな。

「あそこに橋あるけどさあ、どうする？」

クソビッチの指差す先には大きな吊り橋が架かっている。

結構なボロだが、まあ渡れなくもなさそうだな。

周囲ひとけに人気というか魔族の姿はないし、渡るならさっさと渡っちまおうぜ。

「渡っている最中に橋が崩れでもしたら大変じゃ。ここはマリーナの魔法で向こう側まで行った方がええじゃろ」

「そうですね、少々魔力は消費させていただきますが、お願いできますかマリーナさん」

「えー、なんでよお、橋あるんだから橋で行けばいいじゃん」

「マリーナ、頼む」

「はあーいつ」

洪とどろっていたクソビッチだったが、愛しの勇者様に言われて即座に頷いてやがる。

にしても、本当にすごい裂け目……というか谷だ。

これ全長何キロあるんだろ、左右を見ても確認できる限り果てなく続いている。

魔王とか、マジでこんな若造勇者に倒せんのか？

「では念のため、まずは自分が向こう側へ行き、安全を確保する。皆はその後に来るのが良からう」

「おうっ、頼んだぜジョルジュ！」

といつても、周囲に敵影てきえいなんてない。

この三ヶ月、俺も魔族や魔物の姿は何度も見掛けたことがある。

しかし、この勇者パーティの至上目的は魔王の抹殺であつて、敵地の町や村を襲撃して損害を与えることではない。そんな目立つことをしては目的の遂行が困難になるため、これまでは魔族共に見つからないようにこっそりと進んできた。途中で街道を行く魔族の商隊なんかは襲つたりしていたが、それは情報収集や食糧補給のためだ。

「じゃ、いくわよ」

赤毛の美少女ピッチが盾戦士に杖を向けると、先端の赤い魔石が仄ほかに光り、野郎が吹っ飛んだ。吹っ飛んだというより、見えない何かに背中を押されて一直線に滑空していったという方が正しいか。聞くところによると、闇属性中級魔法の〈リベルソウル霊斥〉とかいう魔法だそう。本来は詠唱が必要なのだが、このピッチは詠唱を省略して行使できる才女らしい。

白銀のフルプレートアーマーは瞬く間に小さくなり、向こう側に到着した。

見た感じ、向こうはこちらより少しだけ低地だな。

しばらくすると、奴が身の丈ほどもある大盾おおたての一つを高く掲げて、こちらに合図を送ってくる。

「んじゃ次はおれ頼むわ」

クソピッチの魔法によつて、今度はチャラ男が向こう側に飛んで行った。

「次はクリステラだな、マリーナ頼む」

勇者の指示で我が女神たる金髪エルフ美女が中空を滑るようにして、幅広な谷を渡っていった。

ああ……俺は常にあの人の美貌を視界の端にでも収めていないと、今にも窒息しそうになる。

「次は自分をお願いします」

「なアに言うつとるか馬鹿モンツ、次は僕に決まっとうろが！」

そういえば、このジジ馬鹿も女神の側にいないと窒息するんだっただか。

「そうだぞクソブタアツ、テメエは最後だボケ！」

「……はい、すみません」

「つていうかさあ、あんたなに勝手に口開いてるわけえ？ 息臭いし声キモいし、許可したとき以

外は喋るなつて前言ったわよねえ」

思わず言い返したくなるが、我慢だ。

今夜もこいつを脳内でヒィヒィ言わせた。

「おい待て、アレなんだ……？」

クソピッチが今まさにジジイに杖を向け、先端の魔石が光りかけたとき。

不意に勇者が向こう側を指差した。

谷の向こうにもこちらと同様に丘が広がっているが、その丘の稜線りょうせんから何かが出てきた。

目を凝らしてよく見ると、それは……

「あれは、まさか……オークか?！」

「なんでこんな場所でタイミング良くあんなに出てくんのよ!」

「ええいつ、驚いておる場合ではないぞ! 早う儂の愛しい孫娘をこちら側に引つ張るのじゃマリナ!」

丘の向こうからはオークの集団が続々とその姿を現している。

パッと見ただけでも数百はいて、その数は現在進行形でどんどん増えている。

遠目に見た限りでも緑の体色と丸っこい肥満体型をしているのが見て取れた。軽装から全身鎧を着ている重装な奴まで様々で、しかし一様に剣や槍を手にして「ムオオオオオ!」とか叫びながら突進してくる。

「つて、ちよつとなんか後ろからも来てんですけど!」

クソビッチが振り返って驚いた声を上げたので、釣られて俺も背後を見た。

すると、向こう側と同様にオークの大集団が丘の陰から次々と出現し、こちらに迫ってくる。

「なんだつ、どういふことだ!? なぜこないきなり奇襲を掛けられている!」

「おおおおおおつ、クリスウウウウウウ!」

……そういえば昨夜、不寝番をしているとき、なんか変な人影を見た気がする。

でもあのときは疲労困憊^{こんぱい}で意識が朦朧としていて、見間違いだつたときの罰が怖くて黙っていた。もしかしたら、あれオークの斥候^{せこう}かなんかだつたのかもしれない。

魔族側には勇者一行が魔國領に潜入していることは露見してはいないはずだが、これまでにクソ勇者共は何度か魔族共を襲っていた。そのときに実は一人二人くらい取り逃がしたりして、黄金の剣を持った超絶強い人間がいるという話が広まっていてもおかしくはない。

ここつてもう中魔族ことオーク共の領域だし、俺たちが気付かなかっただけで、警戒網とかに引っ掛かった可能性は否めない。

「アル、どうする？」

「あまり目立ちたくはなかったが、こうなつた以上、殲滅せんめつするしかない。奴らを血祭りに上げて、一匹は尋問するために捕らえる」

「そんなことはええから早う儂を向こう側に送れと言うとるじゃろがマリーナア！」

「はいはい、分かつたから唾飛ばさないでよガートお」

オークの出現に驚いていたクソ勇者とクソピッチだったが、早くも落ち着いている。

敵集団はこちら側と向こう側の数を合わせれば目算で軽く二千以上はいるはずだが、この程度は敵にすらならないのだろう。

それくらいこいつらが強いということは俺も知っている。

「クウウウウリスウウウウウウッ！」

「よし、ではまずは向こう側の敵を全員で片付けよう」

エルフジジイが勇ましく女神の名を叫びながら飛んで行くと、超絶イケメン野郎がそう言った。

「ええ、べつにいいじゃん。向こうは四人に任せてさあ、あたしらは二人で一緒にあいつらぶつ殺そう？」

「どんなときでも油断大敵だ、安全確実に向こう。おれはともかく、お前たちに何かあつてからは悔やむに悔やみきれん」

「ああんつ、さすがアル優しいい！ でもお、こいつはどうするう？」

「ふえ……？」

突然、若造とビッチの二人から目を向けられた。

オーク共は既に百メートルくらい先まで迫ってるつてのに、やはり全く焦燥感などは見せておらず、むしろ落ち着き払っている。

それはいい、実に頼もしいことだ。

しかし……あのオーク共に向けられていた視線と今まさに俺に向けられている視線が同質だと思うのは気のせいだろうか？

まるでウンコにたかるハエでも見るかのような眼差しだ。

「これまではさあ、クリステラがどおしてもつて言うからあ、こいつ同行させてやってたけどさあ」

「ああ」

「正直い、このブタ邪魔じゃん？」

「そうだな」

お、おい、なんだお前ら、なんだその目は、やんのかウンコ野郎。

「おいブタ、そのリュック下ろせ」

「え……い、嫌です」

「いいから下ろせつつてんだろ！」

闘気と聖剣の加護によって強化された勇者の腕っ節に敵うはずもなく、俺は抵抗虚しくあつさり
と巨大リュックを奪われた。

既にオーク共の大軍は五十メートル先まで迫っている。

「キヤハハハッ、事故死ならクリステラも文句言えないよねえ！」

「そうだな。クリステラには悪いが、これも彼女のためだ」

二人はふわりと宙に浮き上がった。

勇者のブーツが飛翔靴という超希少な魔法具であるらしいことは知っている。

そしてピッチは天才魔女であり、その卓越した魔法力を駆使すれば自分一人が空を飛ぶことくらい
朝飯前だ。どちらも相当に魔力の消耗が激しいらしいから、あまり使つてはいなかったが……

今日のパンツは黒か、コンチクショウ！

「ま、ままま待つてくさいいいい！」

俺は咄嗟に勇者が片手で楽々とぶら下げている巨大リュックに飛びついた。

このままでは死ぬつ、不味いつ、こんなところで死んでたまるか！

「このブタアツ、しがみついてんじやねえぞグズが！」

「超キモいんですけどお、さっさと下りなさいよバーカ！」

「ぶへう!!」

クソピッチから杖で何度も叩かれるが、俺は放さない。

放せばオーク共にぶっ殺されて人生が終了する。

記憶どころかチンコがなくても、超絶ブサメンのデブでも、俺はまだ生きていたなのだ。

「チッ、いい加減にしやがれ！」

「うお!？」

聖剣エクスカリバーで突きを入れられたが、辛うじて回避する。

しかし野郎には一片の情け容赦もなく、続けて刺突攻撃を繰り返された。

当たり前そうになったので思わず手を放してしまう。

「クツッ、ちよつとリュック切れちまったじゃねえか！」

「アル、早く行こーよお、それくらい後でクリステラに縫わせればいいじゃあん」

「そうだな」

クソ勇者は溜息と共に頷くと、地べたに這いつくばる俺を嘲笑しながら見下ろしてきた。

「あばよ、ブタ野郎。テメエはブタらしくオーク共に食われて死ねや」

「あ、でもそれってえ、共食いだよねえ、キャハハハハッ」

「待ってっ、待ってっ、待ってっ、お願いしますううう！」

俺の必死の呼び掛けに待ってくれるはずもなく、クソ勇者とクソピッチは二人仲良く空を飛んで向こう側へと渡っていく。

その直前、白い何かがひらりと宙を舞った。

パンツだ。

リュックの破れ目からこぼれ落ちた穢れなき純白のパンツが谷底へ落ちようとしている。

「……………」

俺はちらりと背後を振り返った。

「ムウオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

まるでブタの如きブサイク面をした緑肌のオーク集団が雄叫びを上げ、もう十メートルくらいのところまで迫って来ている。

戦っても勝ち目がないことは明々白々であり、逃げようにもこんな谷に落ちたら確実に死ぬ。

進んでも退いても死ぬならば、どうするか。

男ならば、せめて希望のある方へ突き進むのみだ。

「ぬうおおおおおおおおおつ！」

俺は渾身こんしんの雄叫びを上げながら足を踏み出した。

どうせならば最後は華々しく散りたい。

「……ッ!？」

背後のオーク共が驚愕して息を呑んだのが分かった。

と同時に、断崖絶壁から全力で飛び出した俺は純白のパンツを掴み取る。

この白さ……間違いはない、これはクリステラさんのパンツ！

直接拝見したことはないけどあのピッチが純白を穿くはずないから消去法的に女神の聖衣ッ！

「……ッ!？」

身体が重力に引かれ始めたとき、俺は遅まきながらも気が付き、思わず目を疑った。

これは、この微かな染みは、まさか……

まだ洗濯されていない……使用済みパンツ、だと……ッ!？」

俺は落下しながら、どんどん遠ざかる青空に感涙の雫がこぼれ落ちていく光景を見ながら、パン

ツと一体化した。

染みのあるクロッチ部分がちょうど鼻の位置に来るように、覆面のように被った。

「ありがとうございます……クリステラさん……」

最後の最後で女神に近付けた幸福に感謝ながら、俺はゆっくりと目を閉じた。

願わくば、クリステラさんが無事でありますように。

そうして、俺は無明の闇の如き谷底へと落ちていった。



かつてない多幸感に見舞われて脳が蕩け始めたので、俺は目を瞑り、胸の前で両手を組んだ。さながら敬虔な信徒の如く、俺は女神へと感謝の祈りを捧げる。

そして全身から力を抜いて来たるべき衝撃に備えつつも、深呼吸は止めない。止められない。

「……………」
ん、あれ……？

なんだ、いつまで経っても衝撃が来ない。

まさかこの谷、そこまで深いのか？

と思った直後、重力に引かれる前代未聞の落下感が消え失せていることに気が付いた。

「……………ん？」

恐る恐る目を開けてみると、すぐ側に光が見えた。

周囲は完全に無明の闇なのに、ぼつんと虚空に小さな光が灯り、そのすぐ横に顔がある。

美少女の顔だ。

「……………」

「……………」

しばし見詰め合う俺たち。

俺は上下逆さまでなぜか宙に浮いているので、美少女の顔も上下逆さに見えている。

それでも相当に可愛いことが分かる。

大きく見開かれた双眸の奥には妖しく黄金に輝く瞳が俺を映し、ツインテールの銀髪が彼女自身の右手に宿る光球により、闇の中で繊美な煌めきを放っている。両の側頭部あたりには捻れた太めの角がやや上を向いて生えていて、くつきりとした目鼻立ちも相まって内面の快活さが窺い知れる。周囲全てが闇と静寂に包まれた中、俺たちは互いに瞠目して見つめ合い続ける。

「……………え、角？」

「ふうえあ!!」

俺が疑問に眉根を寄せると、美少女が素っ頓狂な声を上げて後退した。

今さっきまでは近すぎて顔しか見えなかったが、美少女はかなり際どい格好をしている。

紫色のブラジャーとパンツ、そして同色のロングブーツとロンググローブしか綺麗な素肌を覆い隠していない。

「あなた……………え？　なんで上から……………？　ていうか、なんでパンツ被ってるの……………？」

たぶん魔法であろう光球を浮かせている右手と、俺を指差す左手を震わせながら、困惑の声を漏らす美少女。

周囲の闇に溶け入りそうで見え辛いのが、彼女の背にはコウモリめいた濃紫の翼が見える。

「……………」

「え……………え？　な、なんか言ってる……………？」

ふむ、可愛い子だな。



おっぱいは特に大きくも小さくもないが、頭から爪先まで均整の取れた身体付きは理想的なスタイルといえる。

ここには俺と彼女以外、誰もいない。

これで相手がサキユバスっぽい見た目をしていなければ、今すぐにでも襲いかかりたいくらいだ。あ、でも俺チンコないんだった。

「……その、肌の色……あれ、じゃああなたが……？　でもなんでこんなところに？　あつ、もしかしてこの上で……あれ、でも……あれ？　あれ？」

いや待て、なんで俺は死んでないんだ？

おかしいだろう考えても。未だに俺が生きているはずがない。

しかもなんか宙に浮いてるし、明らかに普通の状況じゃない。

つまりこれは……夢？　幻覚？

「あなた……落ちちゃったの？　人間共は？　ていうか、こんな偶然わたしの前に落ちてきたの……？」

ま、なんでもいいか。

目の前に俺好みの美少女がいるんだ、せめておっぱいを揉んでみたい。

これが夢幻の類いなら、それはそれで問題ない。

本当に助かっていたとしても、一度は死を覚悟したんだ。もう何がどうなろうと知ったことか。

クソ勇者共に抑圧されて過ぎてきた日々のストレスは、もうおっぱいでしか発散できない。

「それって……え？　すごい偶然っていうか、運命？　いきなり空から降つてくるとか……なにそれ、普通あり得ないよね……？」

相手が淫魔ならおっぱいの一つや二つ揉ませてくれるだろう。

それで吸精きゅうせいでも何でもされて死んだとしても、むしろ本望だ。

うん、そうだ……よし、恐れるものは何もないのだ！

「お嬢さん」

「——ふえ!?　え、あ、わたし？」

「突然で申し訳ありませんが、おっぱいを揉ませていただけませんか？」

俺は紳士だからな、丁寧に行く。

こんなキモメンのデブなら、俺は童貞だったはずだ。

初心者に無理矢理はキツイし、サクユバスだろうと初対面の美少女に無礼はいけない。

「お、おっぱい……？」

「おっと、これは失礼いたしました。名も名乗らず淑女のおっぱいを揉ませて欲しいなど、紳士にあるまじき失態……どうかお許しください。私の名はロミオ、よろしければ貴女あなたのお名前をお聞かせ願えますか？」

「え、あ、わたし……ミルティス……」

呆然とした顔で俺を見つめながら、ただただしく答える銀髪ツインテ淫魔美少女。

「ほお、ミルティス……大輪の花が今まさに咲き誇らんとする貴女にこれ以上なく相^{ふさわ}応^あしい可憐な名ですね」

「あ、い、いや、そんな……ことは……」

戸惑いを見せながらも、どこか嬉しそうにはにかむ美少女ミルティス。

可愛いなあおいつ！

というか……え、これってマジでイケるんじゃないかね……？

「では改めまして、ミルティスさん」

「は、はい」

「おっぱいを揉ませてはいただけませんか」

至極真面目な感じに表情も声音も引き締めて問い掛ける。

といつても、今の俺はパンツで顔の半分くらいは隠れてるから相手には伝わらんかもしれんが。

「え、えつと………いい、いいです、けど……」

おおつ、さすが淫魔！ 気前がいい！

しかも微妙に恥ずかしがっているとこなんか初々しくていい感じだなおい！

「で、でも、その前に、顔を見せて」

「……え」

かお……顔、だと？

い、いや待て、それは不味いんじゃないのか……？

デブというだけならば未だしも、俺レベルの超絶キモメンだと知られたら、さすがのサキュバスも冷めるかもしれん。

俺の素顔とパンツ覆面、どちらがマシかと問われれば、断然後者のはずだ。

「か、顔、ですか……」

「うんっ、顔！」

「い、あ……そうですか、分かりました」

銀髪でツインテな美少女から期待と恐れが入り混じった純真な瞳で力強く見つめられては断れなかった。

しかし、問題はない。

「本来、礼儀として素顔を晒すことは至極当然の常識でしたね。ですが、非常に失礼なお願いなのを重々承知で申し上げます……先に、おっぱいを採ませてもらえただけませんか」

「え、先に……」

いかんっ、反応が芳しくない！

「も、もちろん、貴女にとっては不快かつ抵抗感のあることでしょう。突然現れた、女性の下着を被った見ず知らずの変質者に、おっぱいを触らせる。常識では考えられない変態の如き淫猥な所業

です」

「え、でもわたし、淫魔族だよ……?」

「見たところ、そのようですね。しかし、貴女が可憐な美少女であることに変わりはありません。そして私が女性の下着を被った見ず知らずの変質者である以上、私のお願いが無礼であることにも変わりはありません」

「嘩然とした顔でじっと見つめてくる。」

「相手が少女とはいえ、サキュバス相手に綺麗事を言いすぎたか？」

「いや、もう引き返せんつ、この勢いで突っ走る！」

「お願いです、どうかこの通り、先におっぱいを揉ませてください」

「俺は頭を下げた。」

「美少女とは上下逆さまで闇の中に浮いているから、下げる前より頭の位置が高くなってしまいが、そんな表面上のことはどうでも……つて、あれ？」

「なんか下の方に微かな光が見えるぞ。」

「闇の中をすーっと細く線状に光ってるつてことは、もしかしてアレって裂け目なんじゃね？」

「ということはずまり、ここは谷の奥深くで、でも俺は上下逆さに浮いてるつてことになる。」

「うん、よし、今はおっぱい以外考えないようにしよう。」

「う……ん、いいよ……?」

「おおっ、ありがとうございます!」

「た、ただし、十秒だけねっ」

「十秒もよろしいのですか!」

顔を上げると、美少女はモジモジしながらも、どこか恥ずかしげに視線を泳がせている。

美少女以外は闇一色なせいとか、小さな光に照らされる肢体に俺の意識は集中せざるを得ない。傷一つない素肌や下着姿同然の半裸体は少女らしからぬ艶めかしさを秘めており、妙に劣情を掻き立てられる。クソ野郎にぶった切られていなければ、息子は今頃完全に臨戦態勢をとっていただろう。

「で、では……ぐ、あれ、う、動けん……?」

美少女に近付いてきちんと向き直ろうとしたのに、身体が動かなかった。

いや手足は動くんだけど、いくら頑張っても前後左右上下にも進めず、身体の上下を反転させることすらできない。

「いいよ、わたしも逆さになるから」

淫魔で銀髪ツインテな彼女は背中のコウモリめいた紫翼を微かに上下させて、くるつと逆さになって近付いてきた。しかしツインテールは垂れ下がることなく、毛先は変わらず足下を向いている。

というか、今気付いたけど、尻尾もあるな。

翼と同色で細長く、先端が平たい菱形になっている。

「じゃ、じゃあ、えっと……どうぞ……？」

俺の手が届くところまで近付いてくると、美少女は両手を後ろ手に組み、やや胸を突き出してきた。彼女の右手に光源があったので、美少女自身の身体で光が遮られて顔やおっぱいがほとんど何も見えなくなる。

「ミルティスさん、光を前に出してはくれませんか」

「それは……嫌、ダメ、なんかちよつと……恥ずかしいし……」

少女とはいえサキュバスが恥ずかしがるとはどういうことだ。淫魔つてのは性に開放的で、むしろおっぱい揉まれるときの顔を見て欲しいとか思ってるんじゃないのか？

しかし、ここで強引に頼めばこの好機自分がご破算になる可能性がある。

「なるほど、失念しておりました、申し訳ありません。たしかに女性からすれば、羞恥心を覚えて然るべき行為。見られたくないのは当然でしたね」

「で、でもわたし、サキュバスだよ……？」

「ですが、貴女は年頃の可憐な美少女でもあります」

なぜか息を呑んで硬直する美少女。

表情なんかは暗くて分からないが、背中から漏れる光で身体の輪郭などは分かる。

「ところでミルティスさん、服を脱ぎ忘れていきますよ」

「え……？」

「え？ 当然、生なまで触らせていただけなのですよね？」

さも当然の真理を否定された風を装った。

こうして自然に要求すれば、生を拒絶されても行為自体を拒絶されることまではないはず。

「な、生……う、わ、わかった」

躊躇ためらいがちに可愛らしく眩くらき、ミルティスは背後に回っていた左手を胸元に持っていった。

そしてたぶんブラジャーそのものをたくし上げて、モジモジしながら再度後ろ手に組んだ……と思う。暗くてよく分からんからな。

「で、では……触りますよ」

「……うん」

了承の声が小さく返ってきたので、俺は身体の輪郭から位置を推定し、ゴクリと唾を呑んだ。

クソ勇者共に拾われてからこっち、女体に触れるのはこれが初めてだ。

おっぱい……おっぱいの感触って、どんななんだ？

「……」

俺は心臓が早鐘を打ち始めるのを自覚しつつも、緊張に強張った両手をゆっくりと近付けていく。

そして、触れた。触れてしまった。

「ん……っ」

ふみよん、とした。

微かな吐息が美少女から漏れ出るのも気にせず、俺は十指を沈めていく。

張りりと弾力があるのに、俺の知るどんなものよりも柔らかい。両の掌中央には他と感触の違うポツチの存在が確認できるが、今は気にしている余裕がなかった。

なんだこれは、なんなんだこれは……っ！

「は、はいっ………終わり！」

「え……？」

急に手を振り払われた。

十秒？ え？ もう十秒経つたの？ 嘘だろまだ一秒だろ？

完全に光の消えた闇の中で、しばしごそごそと蠢く^{うごめ}気配がした後、再び光が生まれた。

ミルティスはやや釣り目がちな活発そうな美少女顔を赤く染め、俺をチラチラと見てくる。

あかんです、可愛いです、もつと揉みたいです。

俺はチンコないから、相手が淫魔だろうと精を絞り尽くされて殺される危険性はない（と思う）。直接的な手段でぶっ殺されるにしても、こんな美少女に手を出した末の結果なら甘んじて受け入れよう。

だからもう一回触らせて欲しい。

「じゃ……じゃあ、顔見せて……？」

「……………」

しかし、こんな初々しそうな美少女に無理矢理襲い掛かっていいのか？

というか、いつの間にかミルティスは俺の手がぎりぎり届かないところまで後退している。

ここは当初の約束通り、顔を見せてやるのが筋ってやつだが……

「……分かりました」

うん、そうだな、筋は通さなきゃな。

クソ勇者共みたいに卑劣な真似はしちゃいけない。

こんな前代未聞の超絶キモメンのブタ野郎（たぶん三十路くらい）が、淫魔とはいえ美少女のお

っぱいをちよつとでも触れたんだ。

十分じゃないか、望外の幸福だよ。

これで悔いなく死ぬるつてもんだ。

「あ、あらかじ予め言っておきますが、素顔を見ても驚かないでくださいね」

「うん……わかった」

俺の緊張にあてられたのか、ミルティスの方も硬い声でぎこちなく頷く。

しかしどうせならマ○コの方も見て触りたかったなあ……などと思うことで現実逃避しながら、

俺は覆面のように装着していた女神の聖なる衣を外し、丁寧に畳んでポケットにしまった。

さあつ、キモいだのクサいだの死ねだの言ってる煮るなり焼くなり好きにするがいいさ！

愕然と両目を見開き、口を半開きにして見つめられる。

美少女から蔑視されていると思えば快感を覚えないでもない……わけねえだろ、俺はマゾじゃねえんだよ。

「や……やっぱり……」

やっぱりキモメンだったって？

そりゃあ俺みたいな低身長デブの顔なんてある程度は予想できてただろうね。

この子の身長は……見た感じ俺と同程度だが、横幅は俺の四分の一くらいだ。

「この、聖地で……こんな……タイミング良く……わたしの、目の前に……降ってきて……？」

俺から目を逸らさぬまま、震える声でなんかブツブツと呟き始めた。

どうにもあまりのキモメンっぷりに衝撃を受けすぎて、まともに思考できていないっぽいな。

はあ……もう自殺しようかな……いやマジで……

「……しかも、神子様みこさまで……紳士だし……こんな、こんな……格好良いなんて……」

ん？ 今なんか格好良いとか言わなかったか？

いや……いやいやいや、格好悪いの聞き間違いだろ、うん。

「あ、あのっ！」

「——うお!？」

呆然としていた美少女から突然詰め寄られ、俺は思わず仰け反った。

興奮も露わに頬を染め、口元には純情可憐な笑みを咲かせて、金色の瞳を宝石のようにキラキラと輝かせながら至近距離から見つめてくる。

「ロミオ様は独身ですか!？」

「え、あ、そりゃあ、まあ……」

記憶喪失とはいえ、こんな超絶ブサイクのデブ野郎に嫁がいなかったことくらいは分かる。だから当然子供だっていなかったはずで、そもそも俺の股間にはいるべきはずの息子すらいないので、真正正銘の独り身だ。

「ていうか……様って、君ね？」

俺は淫魔を含む魔族と敵対している人間なんだからさ。

「でっ、では！ ではわたしと結婚してくださいっ！」

「……………え」

え？ ケッコン？ ケッコンってなんだ？

血痕……けっこん……結婚……？

「す、すみません、もう一度お願いします」

「わたしとっ、結婚してくださいっ！」

「……………結婚」

俺の脳内で様々な単語が飛び交った。

美少女、おっぱい、結婚、人間、チンコ、聖剣、マ○コ、クリステラさん、おっぱい、淫魔、キモメン、死んだ、闇、デブ、おっぱい、クソ勇者、息子、人生、吸精、おっぱい、エッチし放題。

「もちろん、喜んで」

「ほんとに!?! やったーっ!」

こうして、俺は彼女と出会った。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>